



高校は、母の母校で農業科があるところでした。当時は酪農に興味はなく、農業系に就職できたらよいな、程度の考えでした。しかし2年生のとき、農業クラブの家畜審査(肉用牛)に参加して、牛に興味を持ち、当時の先生に本校への進学を勧められました。将来は教員資格を取得し、母校の高校に牛の管理を復活させたいと考えています。以前は内気な性格でしたが、高校進学後に「自分はこれだけやった」と証明したいがために頑張ってきました。本校でも同様に、胸を張った経験を残したくてクラブに参加しました。(1年生、藤原 奏太さん)



実家が酪農をしているので、将来継ぎたいと思って進学しました。卒業後はすぐに就農するつもりです。父も祖父も卒業生で、私で3代目です。本校では、繁殖や給与メニューを理解し、技術を向上したいです。ショウカウに興味があったのでクラブに参加しました。実際にリードをしてみて、緊張しましたが、ほかの酪農家と同じ場に立てたことは、すごく楽しかったです。(1年生、増田 奈緒さん)



実家は酪農家で、将来後継予定です。本校は地元の学校より乳牛の頭数が多く、牛と触れ合える機会も多くあるため進学を決めました。在学中に取れる資格はすべて取得し、就農後にはそれらをフルに使っていきたいです。高校2年生のときに実習した酪農家さんは共進会に熱心で、自分も興味を持ち、それから共進会に取り組むようになりました。岡山県はホルスタインだけでなく、ジャージー牛の共進会もあって面白いです。共進会シーズンには進んでクラブに参加しました。(1年生、中村 勝秋さん)

**概要**

公益財団法人 中国四国酪農大学校  
第1 牧場ホルスタイン80頭、和牛50頭  
第2 牧場ジャージー 140頭  
部員 11名

活動内容：酪農家の子弟だけでなく新規就農や酪農関連産業への就職を希望する学生が学ぶ中国四国酪農大学校。ここで春と秋の共進会シーズンを中心に、その出品を目指して集まる有志がホルスタインクラブ。ショウを目指し普段とは違う目線で乳牛を管理することで、より深い気づきを得ることができると活動に力が入る。  
担当教諭：関 哲生 先生

酪農に憧れや興味を抱き、実践をとおして酪農を学ぶ学生達は今、何に興味を持ち、どのような活躍をしているのか？  
未来の酪農業界を担う期待の星を紹介！



NO.12

**(公財) 中国四国酪農大学校**

多くの共進会で歴代OBが活躍してきた中国四国酪農大学校。ホルスタインクラブは共進会シーズンに入る2カ月前に自己参加型で結成される。クラブ員全員が、どの牛でもリードできるよう、調教や管理に取り組んでいる



クラブでは共進会に向けて、限られた日数で乳牛のコンディションを整えなければなりません。こうした管理から、普段の管理では気づけないさまざまなことが学べるのではないのでしょうか。共進会では牛を通じて、人とつながり、ネットワークを広げることができます。場合によっては就職先を見つけることもできます。活動を通じて、きつい実習でも「この牛がいるから牛舎に行きたい」、そう惚れ込める牛がいることがモチベーションになります。(関 哲生先生)



高校には繁殖和牛と肥育牛、乳牛がいましたが、和牛が優先されていました。しかし乳牛をもっと知りたかったし、技術や資格も習得したかったため本校に進学しました。乳牛は新規就農が難しいですが、和牛から始めて、後に乳牛も一緒に管理できれば面白いと考えています。クラブで初めて乳牛の共進会に参加し、共進会に向けた管理でしか学べないことがあったと感じています。やはり牛には魅力があり、やればやるだけハマります。(1年生、落合 七海さん)



実家は非農家ですが、将来酪農をしたいと強く望んでいました。高校でのインターンシップ先が本校の卒業生で、自分でも調べてみると学べることが多いと知り、ここで酪農を深く学びたいと思い入学しました。将来は地元に戻って地域の人達と触れ合える牧場を作りたいです。共進会では牛に触れ、牛を知る機会を得ました。いろいろなことが初めてで緊張しましたが、納得できない部分もありましたが良い経験になりました。(1年生、池田 琴美さん)

学生牛部は今!